

## 第二百七十六話 志士たちの熱と日本

大東亜戦争の目的は、自存自衛とアジア解放である。我が国は、大東亜共栄圏構想確立のため、共栄圏外交を推進した。特務機関も陰に陽にアジア解放のために、各国の独立運動組織や個人(志士)を支援した。共栄圏外交の仕上げは1948/11/5開催の大東亜会議である。そこに集った志士たち等の活動とその後を略記する。彼等の熱が日本を動かした。尚、満州と中華民国も参考までに、記述する。



### 1 大東亜会議参加者

日本(東条英機首相)、中国(汪精衛行政院長)、満州国(張景恵國務総理)、タイ(ワン・ワイタヤコン首相代理)、フィリピン(ラウレル大統領)、ビルマ(バー・モー首相)で、自由インド仮政府のC.ボース主席も陪席した。英植民地マラヤや、蘭印は、会議当時は日本軍の占領下であったものの、行政機能も極端に低く、大東亜政略指導大綱において帝国領とすることとされ、独立検討の対象ですらなかった。仏印は日本と友好関係にあるヴィシー政権の植民地のままであったため会議には参加していない。独、伊の参加は当然なしである。

### 2 志士列伝

#### (1) インド：チャンドラ・ボース (1897-1945)

穏健なガンジー、中間的ネールと違い国民会議派の急進派のリーダー、当初独に援助を求めて亡命、1943/5 来日、自由印度臨時政府主席兼国民軍司令官としてビルマ戦線に。1945/8 日本に向かう途中台湾で不時着炎上。東条首相と意気投合した。蛇足ながら、大正時代に日本に亡命していた独立運動家ビハリ・ボースも日本に居た。

#### (2) ビルマ：バー・モウ (1893-1977)、アウン・サン (1915-1947)、ネ・ウィン (1911-2002)

日本亡命中のアウン・サン、ネ・ウインは南機関長の指導でビルマ独立義勇軍を組織、母国の解放戦争に従軍した。アウン・サンは、バー・モウ内閣の国防相に就任するも後日本軍政に反発抗日戦に踏み切る。バー・モウは投獄されていたが、ビルマ進撃した日本軍に保護され、1943/8 独立したビルマの首相に。戦後巣鴨に拘置されるが釈放帰国。

#### (3) インドネシア：スカルノ (1901-1970)

民族主義インドネシア国民党のカリスマ的指導者。再三蘭官憲に投獄されるが、戦時中は日本軍の保護を受ける。

#### (4) フィリピン：ラウレル (1891-1959) 日本比占領後行政委員会委員長、1943 初代共和国大統領、1944/9 米英に宣戦布告、1945/3 末台湾に亡命、戦後戦犯指定巣鴨に収監、帰国後上院議員、収監中に息子に日本民族と共に歩めと諭したという。

#### (5) 中華民国：汪兆銘 (1883-1944 (「汪精衛」とも)) 孫文の側近として活躍して党の要職を占めた。知日派として知られ、1940年3月、南京に日本の傀儡政権である汪兆銘政権を樹立し、同年11月には正式に主席となった。1944年、名古屋市にて病死。蒋介石と対立と協力を繰り返した。汪兆銘の後には主席代理であった陳公博が就任した。国民政府は、ポツダム宣言受諾が公表された翌日の1945年8月16日に解散した。南京政権の要人は、蒋介石によって叛逆罪で処刑された。

#### (6) 満州国

愛新覺羅溥儀(1906-1967)清朝最後の皇帝にして、満州国皇帝(1934-1945)である。日本亡命の救援機を待っている間にソ連に逮捕抑留された。東京裁判では連合国側の証人として出廷、その後中共に身柄移送、戦犯として収監、1959/12 恩赦により釈放、満洲族の代表として政協全国委員を務めた。

(了)